**第八章　　内発的発展論へむけて**

第七章の内発発展論パラダイムを深追いしたもの

内発性のいみ、内発的発展の定義、生活様式との関係性、創造のプロセス、にない手の五つに分かれている

**（1）内発性のいみ**

　　　　　　　　　　内発性：外からの刺激によらず、内からの欲求・衝動によって起こること

だがここでは…

→時間をかけ、その気になって、外来のものと、在来のものとを、たたかいあわ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　せ、あるいはむすびあわせることをとおして、双方を創りかえてゆくこと（P190、6～9行目）

**（2）内発的発展の定義**

　　　　　　　　　　衣食住の基本的欲求を充足し人間としての可能性を十全に発現できる、状況をつ

　　　　　　　　　　くりだす（P193、12～14行目）

　　　　　　　　　　↑

　　　　　　　　　　各々の自然環境に適合し、文化遺産や歴史的条件に基づいて、外来の知識・技術・

　　　　　　　　　　制度などを照合しつつ、つくりだされる（P193、16～17行目）

　　　　　　**（3）暮しのスタイルを変える**

発展途上国では、衣食住の基本的欲求を充すような産業に力点をおいて、低所得

　　　　　　　　　　層の生活をひきあげる（P195、1～2行目）

　　　　　　　　　　　　　　一方、先進国ではエネルギーを多く消費する生活スタイルをかえる（P195、10～

11行目）

　　　　　　**（4）創造のプロセス**

アジア諸国の文化に共通する、科学技術を自然の支配の手段ではなく、真理の探

　　　　　　　　　　究と、自己実現と自己抑制の方法とみなす伝統を再発掘し、更生させることで発

展に役立たせることができる（P198、17行目～P199、4行目）

**（5）変革のにない手**

　　　　社会運動、民族運動の波及＝相乗効果（P201、6～11行目）

　　　　草の根の人々の国際フォーラムを組織することで（P201、18行目）

　　　　現在の状況の主要な犠牲者の組織（P202、6行目）

**まとめ**

　内発的発展論においては、地球上の様々な実例を、注意深く見守り、そしてあるも

のには自らも力をあわせながら、相互に比較することをとおして、理論を、低次の一般化からより高次の一般化へと、じょじょに構築してゆかなければならない（P203、2～4行目）